

2024年度①

刑 法

(全 3 ページ)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙・下書き用紙は、この冊子の中に折り込んであります。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 解答は指定された範囲に記載すること。「書き終わり」をこえて記載した場合は、採点をしないことがあります。
5. 試験終了後、問題冊子・下書き用紙は持ち帰りなさい。

刑 法①

次の問題 I・IIのうち1問を選択して解答しなさい。

解答用紙に選択した問題の番号を記入すること。

- I 次の【事例】を読み、甲および乙の罪責について、殺人罪（刑法 199 条）と同意殺人罪（刑法 202 条後段）の関係を論じた上で、解答しなさい（特別法違反の点は除く）。

【事例】

- (1) 甲（男性 50 歳）は、妻乙（女性 45 歳）と 2 人で生活していたところ、乙と相談の上、入院していた甲の実父 X（80 歳）を退院させ、自宅で数か月間、その介護を行っていたが、自力で移動できず回復の見込みもない X は、甲および乙に対して、しばしば「死にたい。もう殺してくれ。」と言うようになった。甲は、X が本心から死を望んでいると思い、その都度 X をなだめていた。しかし、X は本心では死を望んでおらず、乙も X の普段の態度から、X の真意を認識していた。
- (2) 乙は、ある日、甲の外出中、X の介護に疲れ果てたことから、X を殺害しようと決意し、X の居室に行き、「もう限界です。」と言って X の首に両手を掛けた。これに対し、X は、乙に「あれはうそだ。やめてくれ。」と言ったが、乙は、それに構わず、殺意をもって、両手で X の首を強く絞め付け、X は失神した。乙は、その後も、X の首を絞め続け、その結果、X は窒息死した。甲は、X が失神した直後に帰宅し、乙が X の首を絞めているのを目撃したが、それまでの X の言動から、X が乙に自己の殺害を頼み、乙がこれに応じて X を殺害することにしたのだと思った。甲は、X が望んでいるのであれば、そのまま死なせてやろうと考え、乙を制止せずにその場から立ち去った。乙は、その間、甲が帰宅したことに気付いていなかった。
- (3) 仮に、甲が目撃した時点で、直ちに乙の犯行を止めて X の救命治療を要請していれば、X を救命できたことは確実であった。また、甲が乙に声を掛けたり、乙の両手を X の首から引き離そうとしたりするなど、甲にとって容易に採り得る措置を講じた場合には、乙の犯行を直ちに止めることができた可能性は高かったが、確実とまではいえなかった。

II 次の【事例】を読み、自己所有物の特例（刑法 242 条）における「不法領得の意思」および自己所有の建造物等以外放火罪（刑法 110 条 2 項）における「公共の危険」の認識の要否に触れながら、甲の罪責について論じなさい（住居等侵入罪および特別法違反の点は除く。）。

【事例】

- (1) 甲（50 歳）は、実父 X（80 歳）と共同して事業を営んでいたが、数年前に X が寝たきり状態になった後は単独で事業を行うようになり、その頃から売上高の過少申告等による脱税を続けていた。甲は、某月 1 日、税務署から、同月 15 日に税務調査を行うとの通知を受け、甲が真実の売上高をひそかに記録していた甲所有の帳簿（以下「本件帳簿」という。）を発見されないようにするため、同月 2 日、事情を知らない知人の Y に対して、「事務所が手狭になったので、今月 16 日まで書類を預かってほしい。」と言い、本件帳簿を入れた段ボール箱（以下「本件段ボール箱」という。）を預けた。
- (2) Y は、本件段ボール箱を自宅に保管していたが、同月 14 日、甲の事業の従業員から、本件帳簿が甲の脱税の証拠であると聞かされた。甲は、税務調査が終了した後の同月 16 日、Y に電話をかけ、本件段ボール箱を回収したい旨を告げた。Y から、「あの帳簿を税務署に持っていったら困るんじゃないのか。返してほしければ 100 万円を持ってこい。」と言われた。
- (3) 甲は、得意先との取引に本件帳簿が必要であったこともあり、これを取り返そうと考え、同日夜、Y 宅に忍び込み、Y が保管していた本件段ボール箱を Y 宅から持ち出し、自宅に帰った。
- (4) その後、甲は、自宅近くの漁港に、沖合に突き出した立入禁止の防波堤が設けられており、そこに空の小型ドラム缶が置かれていることを思い出し、そのドラム缶に火をつけた本件帳簿を投入すれば、確実に本件帳簿を焼却できると考えた。そこで、甲は、同日深夜、本件段ボール箱を持って上記防波堤に行き、本件帳簿にライターで火をつけて上記ドラム缶の中に投入し、その場を立ち去った。
- (5) その直後、火のついた多数の紙片が炎と風にあおられて上記ドラム缶の中から舞い上がり、周囲に飛散した。上記防波堤には、油が付着した無主物の漁網が山積みになっていたところ、上記紙片が接触したことにより同漁網が燃え上がり、たまたま近くで夜釣りをしていた 5 名の釣り人が発生した煙に包まれ、その 1 人

が同防波堤に駐車していた原動機付自転車に延焼するおそれも生じた。なお、上記防波堤は、釣り人に人気の場所であり、普段から釣り人が立ち入ることがあったが、甲は、そのことを知らず、本件帳簿に火をつけたときも、周囲が暗かったため、上記漁網、上記原動機付自転車及び上記釣り人5名の存在をいずれも認識していなかった。